

巨大宇宙船モロトス号は、私たちの知らないはるか外宇宙の恒星系をゆつたりと航行していた。次のワープポイントが間近に迫り、乗組員たちは航路計算に余念がなかった。

何もかもが予定通り運んでいる。キャプテン・ザンガアは微笑み、操縦士長ギイーの肩にゆつくりと手を置いた。

「ギイー、何年になるかな。こうやって宇宙だけを見続けて」

「そうですね、キャプテン。私が操縦士長になってから、もう5年が経ちます。最後に惑星探査を行なったのが成りたての頃でしたから、4年めになるでしょうね」

「4年……、か」

ザンガアは背後の空間をほの暗く描き出すディスプレイをじつと見つめ、ワープシステムに不要なすべての電源を落とした。広いコクピットが宇宙と同化したような感覚を覚え、ザンガアはそつと目を閉じる。

「この瞬間が、いちばん落ち着くな」

小さなインジケーターだけが点々と明滅するコクピットで、目を閉じたザンガアはシートに深く沈み込んで呟いた。

「10・9・8・7……」

傍らのギイーが両手で操縦桿を握り、秒読みを始めた。幾度も経験しているとはいえ、やはり緊張するものだ。副操縦士たちはギイーの技術や知識を信頼し、もうザンガアと同じように目を閉じてしまっているものすらいた。

そんな中で、ギイーはしっかりと目を見開いて航路を再度確認し、ワープ突入のボタンをそつと撫でる。

「5・4・3……」

まだだ。ギイーは緊張の面持ちでインジケーターの色に目を走らせ、タイミングを計る。わずかなミスが破滅を呼び寄せるこの瞬間が、極度の緊張が、ギイーは堪らなく好きだった。

今、他でもないこの自分がこの船の神なのだ。隣で静かに目を閉じている尊敬すべきキャプテンはもちろん、生活空間で平和に過ごす女たちも含めて300名に上る乗員の

命が、自分の手に握られているのだから。

ギイーの額を、汗がつつと伝わり落ちる。

「……1・0」

ギイーはそつと、白く輝くワープボタンを押し込んだ。



「つつっ」

急な痛みまゆこに腹を押さえ、繭子はしゃがみ込んだ。胃だろうか、月のものとは異なる鋭い痛みだった。びっくりして一緒にしゃがみ込んだみのりが、心配そうに繭子の顔を覗き込んだ。繭子は顔をしかめ、ううーと声を漏らしている。5分ほどそうしていただろうか、いや、1分くらいだったのかもしれない。繭子はすつと立ち上がり、何事もなかったように歩き出した。

「まゆ、大丈夫なの？」

「うん、もう平気。ちよつとお腹が痛くなつちやて」

「そう、でもちよつとつて感じじゃなかつたよ」

「大丈夫だつて……あつっ！」

そう言つて、繭子はまた顔をしかめた。

「じゃあ銀ぶらハンバーガーツアーは中止だねー」

みのりが残念そうに言つた。幾度かのこんなやり取りの後、ようやくすつかり落ち着いた二人は、ゆつくりと歩き出した。遂に日本上陸したアメリカの有名ハンバーガーシヨップにも未練はあつたし、何よりまだ誰も食べたことのない本場のハンバーガーにひどく後ろ髪を引かれたが、今回は諦めるしかなかつた。もし、あの嫌な里子が週明けに鼻高々で自慢したとしても、だ。



ワープ航法が明けると、視界がパツと開けた。その光景にキャプテン・ザンガアは自

らの目を疑った。何の計算違いなのか、彼の視界を埋めていたのは予定されていた漆黒の宇宙空間ではなく、巨大な惑星であった。

(続きは電子書籍でどうぞ)